

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	金 志虎
論 文 題 目	当麻寺の創建と信仰
<p>審査要旨</p> <p>金志虎君の学位請求論文「当麻寺の創建と信仰」は、当麻寺伽藍の創建事情と信仰の問題を正面に据え、当麻寺が浄土信仰の寺院として成立する過程を考察したきわめて意欲的な研究である。</p> <p>本研究は全六章と緒言、結語から構成され、その内容は第一章「当麻寺の創立を伝える文献—『建久御巡礼記』を中心に—」、第二章「当麻寺創建期における伽藍造営」、第三章「当麻寺金堂本尊の様式と制作背景」、第四章「当麻寺創建期の信仰」、第五章「綴織当麻曼荼羅図と曼荼羅堂の造立」、第六章「中将姫信仰の成立」である。</p> <p>金君はまず第一章で、当麻寺の創立を伝えるもっとも古い文献史料である『建久御巡礼記』の文献批判を中心に、鎌倉時代に当麻寺関連の史料が登場するようになった状況について検討する。『建久御巡礼記』は建久二年(1191)興福寺の実叡によって撰され、当麻寺は麻呂子親王時代の創立で、役行者の本拠地への移転が書かれているが、このことを実証する伝世品や出土品が皆無であることを指摘し、麻呂子親王創立説は当麻寺の歴史を古くするためであり、また役行者本拠地移転説は当時興福寺が役行者後胤と土地の所有権をめぐり争っていたため、興福寺末寺の当麻寺は役行者が土地を寄進したものとし、土地争いに巻き込まれないように作文したものと主張する。</p> <p>つづく第二章は本研究の圧巻ともいべき当麻寺伽藍配置の研究である。現在参拝客は当麻寺には東向きの仁王門から入る。前方には南北に並ぶ金堂と講堂が見え、それらのさらに西には東向きの本堂、曼荼羅堂が建つ。また金堂の南前方の小高い山麓には三重の東塔と西塔が建つ。つまり当麻寺は講堂、金堂、東西両塔という南面する伽藍と本堂、仁王門という東面する伽藍が境内で直交する特殊な配置なのである。さらに加えると金堂の南は山麓がせまって平地はないが、北方には平地が広がっている。まことに不可思議な伽藍配置で、従来このことに言及した人はいなかった。</p> <p>まず金君は当麻寺の境内から出土した川原寺式瓦や埴仏、白鳳仏の金堂本尊の弥勒仏坐像、さらに金堂、講堂の解体修理の結果から、当麻寺の創建期、つまり金堂・講堂の建立を7世紀後半と考察する。これから200年後に金堂南の丘陵地に東西両塔が建立されたが、講堂北には平地が広がるにもかかわらず、創建当初から金堂と講堂は現在地に建てられていたのである。金堂講堂をもっと北寄りに建てれば、東西両塔を平地に建てることも可能であったのだが。こうした堂塔建立地の問題に対して、金君は藤原京内寺院の占地が東西の大路の北側であったことを指摘し、当麻寺の造営は藤原京二条大路を強く意識した結果、二条大路の延長上の北側に占地したことを明らかにするのである。地図上に復原した二条大路の延長と金堂と講堂の位置関係は美事としか言いようがない。したがって、金堂の南に仏塔を建てる計画は創建期にはなかったと言う。これが当麻寺の南北の占地であるが、東西の占地がはじまるのは本堂の曼荼羅堂が西側の二上山にもっとも近い地点、すなわち古墳遺跡の真上に東向きに建てられた平安初期という。</p> <p>第三章では、金堂本尊の丈六塑像の弥勒仏坐像の様式研究を中心に検討する。先行研究は中国や韓半島の仏像との比較をしてきたが、それらを厳しく批判し、改めて同時代作品として勅願寺第二号の川原寺本尊の丈六塑像に注目する。もちろん川原寺本尊は現存しないが、当麻寺から川原寺の創建瓦と埴仏が出土していることから、当麻寺の丈六塑像は川原寺の丈六塑像の影響によって制作されたものと論じる。</p> <p>第四章では、金堂本尊の丈六塑像は鎌倉時代より弥勒仏と称されているが、創建当初の尊名について検討する。第一章で考察した『建久御巡礼記』には金堂本尊の尊名を当初から弥勒であったと記す。しかしながら『建久御巡礼記』は鎌倉時代の成立であるから、500年も前の当麻寺の事情をにわかに信じることもできない。当麻寺は古くから使者が往くところと考えられていた二上山の東麓に建っており、当麻寺の創立者の当麻氏</p>	

はその地域の有力者で、『日本書紀』によると当麻氏は喪葬関連の記事にしばしば登場する。こうしてみると 7 世紀後半の当麻寺は此岸から彼岸の世界へという思想が読み取れる。つまり浄土信仰と関連する要素が多くみられることから、当麻寺本尊の尊名は弥勒よりも阿弥陀が相応しいと言うのである。

第五章では、当麻寺の南北占地と東西占地という特殊な伽藍配置の成立過程における曼荼羅堂の造立を検討する。当麻曼荼羅を安置する曼荼羅堂は、平安初期の建立当初は東向きの間口の広い長方形の建物であったが、平安後期の再建時にほぼ正方形に増築された。こうした変化はわが国の阿弥陀堂の平面形式の変化と一致する。したがって曼荼羅堂は阿弥陀如来を本尊として描く当麻曼荼羅を安置するための阿弥陀堂として建立されたと解釈する。

最後の第六章では、当麻曼荼羅の発願説話で名高い中将姫に関する伝承の成立過程について検討する。まず治承四年(1180)の平家勢の攻撃によって被害を受けた当麻寺では、復興の手段として太子信仰を利用しようとする。ところが建仁三年(1203)に当麻寺出身の僧侶が磯長の太子廟に侵入する事件がおこり、太子信仰を利用する道は閉ざされる。そこで打開策として注目したのが当麻曼荼羅で、太子信仰から当麻曼荼羅信仰に方向転換するのである。その結果、当麻曼荼羅と中将姫を中心とする新たな当麻寺の歴史が展開されることになったと論じるのである。

このように金君が当麻寺の伽藍配置と信仰について、従来誰も到達できなかった問題を解明した研究はきわめて大なるものであると認める。本論文が博士(文学)の学位に相当するものであると判断する。なお金君は本学大学院博士後期課程 3 年で学位請求論文を提出したことを申し添えたい。

以上

公開審査会開催日	2013 年 1 月 24 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大橋 一章
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	新川 登亀男
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	内田 啓一